

「10周年を迎えて」

筑波大学特別支援教育研究センター 左藤敦子

特別支援教育研究センター10周年記念セミナーが12月14日に開催されました。師走の日曜日にもかかわらず、ご参加いただきまして、ありがとうございました。思い返せば、特別支援教育研究センターの設置が決まった頃、私は学生生活に終止符を打てるかどうかの瀬戸際で、新しいセンターができるのかというくらいの認識しかありませんでした。ましてや、自分がそのセンターに関わることになろうとは夢にも思わなかったのですが、この10周年という節目をセンターの一員として立ち会う機会に恵まれたことに感慨を覚えています。10周年記念誌や諸資料からセンターの概要は理解していたつもりでしたが、各先生のお話を改めて伺い、筑波大学の特別支援教育研究センターという存在の意義と今後の10年について、改めて考えていかなければならないことを痛感しました。齋藤先生のおっしゃった「あるものは出す、ないものは創る」…とても明快でシンプルなことばですが、とても難しい宿題だと思っています。



10周年の記念シンポジウムで10年先、20年先を見据えることの重要性を心に刻んだ一方で、今、できることを着実に進めることの必要性も切実に感じています。その一つとして、筑波大学だからこその「教材・指導法データベース」の構築に力を注いでいるところです。ご存知の先生もいらっしゃると思いますが「教材・指導法データベース」の試作版ができあがりしました。これから、各附属の先生方のアイデアや意見も反映させながらバージョンアップしていく予定です。また、先生方のアイデアや意見、教材情報を共有するためにテレビ会議システムを活用することも検討しています。顔をみながら、人の呼吸を感じつつ…が基本だと思うのですが、できるだけ多くの先生方からの教材情報やアイデアを集約するための方法の一つとして、このような意見交換会も設けられたらと考えています。このような附属間の交流が「うちの学校の子どもたちにも使えるかも！」という教材に出会えるきっかけになるかもしれません。ぜひ、一度、覗いてみていただくと嬉しいです。

■特別支援教育研究センター設立 10 周年記念セミナー

特別支援教育研究センター設立 10 周年記念セミナーが平成 26 年 12 月 14 日(日)、筑波大学東京キャンパス文京校舎 134 教室で開催されました。当日は、北海道から大阪までの元現職研修生、元センタースタッフ、大学関係者、附属学校関係者、教育委員会等の関係機関の方々、約 150 名の参加者がありました。

今回の設立 10 周年記念セミナーは、記念講演、記念シンポジウム、事業報告で構成し、セミナーに先立ち、四日市章センター長よりセンターの使命、特色そして今後の課題と展開について触れながら挨拶がありました。また、筑波大学を代表して副学長の阿江通良先生より祝辞を頂き、セミナーは始まりました。

記念講演では、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所理事長の宍戸和成先生より「これからの特別支援教育センターと特総研との関わりからー」というタイトルでお話をいただき、特別支援教育研究センターが設立された経緯を交え今後の特別支援教育のあり方についてご提言を頂きました。

記念シンポジウムでは、筑波大学名誉教授・初代センター長の齋藤佐和先生より「特別支援教育の萌芽と筑波大学特別支援教育研究センターの設置」、筑波大学名誉教授・第 2 代センター長の前川久男先生より「特殊教育と特別支援教育とセンターー新たなものを作り出す協同活動としてのセンターー」というテーマでお話頂き、質疑応答が交わされました。

事業報告では、特別支援教育研究センターの山中健二教諭より「現職教員研修への期待」、宮崎善郎教諭より「附属特別支援学校・センター・教育局の連携による教材・指導法データベース事業」について報告致しました。いずれも今後の特別支援教育研究センターのあり方を問う内容でした。

その後開かれた祝賀会では、ご参加頂いた方々が当時のセンターのこと、またこれからのセンターの話などで盛り上がり、懇親を深めることができました。最後にこの場を借りまして、ご参加頂いた皆様、また開催にご尽力賜りました、多くの皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。



四日市章センター長



阿江通良副学長



■JICA アフリカ研修

11月16日～12月12日、アフリカ7カ国から9名の研修生が訪れ、筑波大学や附属特別支援学校、公立学校等で研修を行いました。ご協力いただきました皆様、本当にありがとうございました。ここでは、附属特別支援学校での研修の様子を一部ご紹介します。

今回、メインで研修をおこなったのは附属桐が丘でした。附属桐が丘では、学習で使用する特殊机、滑り止めシート、書見台、i-Pad など個々の子どもに合わせたハイテク、ローテクの教材・教具に特に関心を持たれたようです。附属視覚では、幼稚部及び高等部の数学を中心に参観し、視覚障害に配慮した指導方法について研修を行いました。また、昼食時には給食を食べながら生徒と談笑している様子も見られました。附属聴覚では、子どもたちのかわいらしい発想や話している様子をにこやかに参観されたり、教育方法について自国と比較しながら熱心に質問をされたりしていました。附属大塚では、全校で事前に練習したスワジランドのダンスを研修生と一緒に踊りました。研修生のアカペラで美しい歌声と共に楽しくダンス交流をすることができました。附属久里浜の幼稚部では集まり活動、小学部では体育を参観しました。どちらも授業に参加する場面があり、子どもたちと手をつないでダンスをしたりハイタッチをしたりして和やかな研修となりました。

今年のアフリカ研修生は意識が高く、非常に熱心だと各校より聞きました。今後のアフリカの特別支援教育の発展に期待したいと思います。



■附属ニュース（附属聴覚）

附属聴覚特別支援学校高等部専攻科ビジネス情報科と造形芸術科の生徒が協力して、「工房わかぎり」の新しいホームページを制作することになりました。「工房わかぎり」とは、附属大塚特別支援学校の在校生と卒業生の親の会である桐親会が母体となってできた通所型作業所です。準備の一環として11月25日から施設見学を行い自己紹介などの交流を始めています。共同制作活動を通して、インクルーシブ教育システム構築を目指した取り組みに発展させたいと考えています。（ビジネス情報科・造形芸術科 内野智仁）



■現職教員研修生日記

千葉県立桜が丘特別支援学校 中村吉伸

4月に現職教員研修生としてスタートを切ったのがつい昨日のこのように思えるほど、充実した日々を過ごさせて頂いていることに心より感謝申し上げます。センター、筑波キャンパス、5校の附属特別支援学校における講義、研修、参観などは本当に勉強になることばかりです。研修を通して出会う先生方の温かさ、児童生徒の持つ力、学生の逞しさ、そしてその学校独自の特色や雰囲気を感じながら日々研修させて頂いております。現場を離れているからこそ経験できることや見えてくるものがあります。また、教員としての専門性で自分に欠けているものや、そういったところをあらためて発見できたことが、今回の収穫の一つではないかと思っています。



今年度、私は「脳性まひ児の自己教育力の育成」についての事例的研究を進めています。現在は報告書のまとめにとりかかっていますが、ここまで研究を進めてこられたのもご多忙の中、優しく丁寧なご指導をして下さる安藤隆男先生のお陰と思っています。研究の楽しさや奥深さを日々実感しています。3月にはよい報告ができるよう、そして自分自身の専門性を少しでも高められるよう努めていきたいと思っています。



千葉県立銚子特別支援学校 根本浩晃

今年度、千葉県の長期研修生として、筑波大学特別支援教育研究センターで貴重な研究・研修の機会を与えていただき、心より感謝申し上げます。また、安藤隆男先生には大変御多忙にもかかわらず、丁寧に御指導いただき、深く感謝申し上げます。

所属校においては、研究指定を受け地域の障害のある子に対して、「通級による指導」を模索しはじめた所です。各障害種別の演習や附属桐が丘特別支援学校での研修、筑波大学の教授・准教授の先生方からの講義等はとても勉強になっております。

個人研究では、「卒業後の生活からみた自立活動の指導」をテーマにあげ、重度・重複障害者の卒業生の保護者に、在学中の指導が今の生活にどのように生きているのかを伺い、自立活動の指導を行う上で大切な点を探っています。在学中の成果や卒業後に感じている切実な思いを伺うことができ、今後の教員生活の糧になることと思っています。



ゴールも迫ってきましたが、最後のまとめに向けて、そして、この一年間に学んだことを現場で生かせるようにこれからも頑張りたいと思っています。